天使

発　行
天使大学　広報委員会
〒065-0013
札幌市東区北13条東3丁目
TEL 011-741-1051(代)
FAX 011-741-1077
http://www.tenshi.ac.jp

天使大学・大学院の状況

「専門職大学院形成支援プログラム」の補助金を受けて（1）

天使大学大学院（専門職）は、2004年、文部科学省による「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」の公募に対して、「自己学習を高め、理論と実践の統合化を図る専門性の高い学習モジュールの能力開発」のテーマで応募し、2004年10月に同テーマが採択され、補助金が交付されました。

「専門職大学院形成支援プログラム」の補助金に関して、２回にわたり学報で報告します。本号では、研究科長である近藤潤子学長が「Ⅰ 専門職大学院開設までの推移」を報告します。次号では、大学院柳原真知子教授が「Ⅱ 補助金を受けて」と題した報告を予定しております。

学長　研究科長
近藤　潤子

Ⅰ．専門職大学院開設までの推移

1．助産師教育の変遷

わが国の助産教育は制度化されて以来、百有余年を経ている。1948（昭和23）年保健師助産師看護師法（保助看法）によって助産師教育は看護教育修了後に位置づけられた。助産師学校、短期大学専攻科はこれを遵守してきたが、十数年前から急速にその数を増やしている大学の学士課程として開設された看護基礎教育には、助産教育課程を４年の学士課程の選択科目として開設する大学が多い。保健師教育課程は、看護師教育課程と統合すると学習効果が高いことから多くの学士課程で両課程を統合し必修として開設されている。しかし、看護教育だけでも修得が望まれる能力は高度化し複雑さを著しく増しているため、そのカリキュラムの過密さが論議の的となっていた。その中に選択科目として設置された助産教育課程は、学習の充実は困難をきわめ、さらに選択できる学生数は少数に限られるので、助産師の供給に質と量の両面から大きな問題を投げかけていた。

助産師教育者の組織である全国助産師教育協議会（全助協）、学術団体である日本助産学会、職業団体である（社）日本助産師会は二十年余にわたって、この事態を憂慮し、大学院あるいは大学専攻科における助産教育を提唱し続けてきた。

看護職業団体は1981（昭和56）年に保健師・助産師・看護師の免許の一本化を総会で決議した。すなわち看護教育が将来、大学学士課程で行われるようになったら国家試験は看護師のみとし、その免許によって看護師、保健師、助産師すべての業務が行えるものとされ、助産師については就業後２～３ヶ月の現任教育が提案されていた。当時この団体は四十数万人を超える看護師、二万人の保健師、一万八千人の助産師によって構成されていたが、総会において大部分の助産師の反対にもかかわらず、助産教育を受けたことのない看護師の多数決によって決議される結果となった。それ以来、助産師の意向に反して水面下で保助看免許の一本化の方向に進められていった。2002（平成14）年に助産教育課程を大学院で行おうとした大学には、法的になんの定めがないにもかかわらず、学士課程に選択科目として置くようにと行政の立場から勧告された。大学改革、規制緩和が急速に進行する中で了解に苦しむ事態であった。

2．天使大学と助産師教育

本学は1952（昭和27）年の天使助産婦学校以来、1965（昭和40）年に天使女子短期大学専攻科として改組転換し、2003（平成15）年に短期大学閉学にいたるまで51年間の助産師教育の実績を持っている。2004（平成16）年３月の学士課程最初の卒業生にあわせて再び助産教育課程開設を図ることに天使学園の同意が得られていたので、あとはどの制度による課程を開設するかの選択が求められた。ちょうどその頃、大学改革の一環として高度専門職業人の養成のための大学院、専門職大学院の法制化が進められていた。法曹の人材育成のため法科大学院が準備を進めていた。この法律は2002（平成14）年12月に国会を通過し、2003（平成15）年３月に省令化された。全助協による助産カリキュラムの検討資料などを参考に、わが国初の高度専門職大学院開設の準備を開始し、同年６月文部科学省に申請の書類を提出した。看護職業団体から基礎看護教育から助産が外れることへの強い反対運動が起こったが、多くの方々の支持によって同年11月に２年制の大学院助産研究科（専門職学位課程）が認可された。長い間、助産教育の在り方に悩み続けてきた助産師や助産教員の方々から、これによって未来が明るくなったと祝福していただいた。専門職大学院の校舎、８号館も竣工し、第１回の大学院生を迎えてまもなく一年になろうとしている。

エビデンス（実践知・証拠・根拠）に基づく知識と優れた技術をもち、女性のそばにあって聖母マリアがエリザベットを訪問したときのように、あたたかい人間性豊かな母と子と家族にケアを提供する助産師を育成するための助産教育の在り方を探求することが本大学院の課題である。

学科・科紹介　—看護学科—

学科の紹介

看護学科長　菅原　邦子

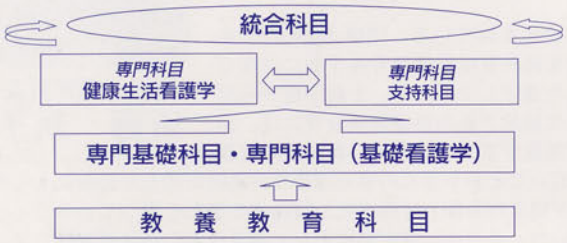
看護学科は、人間にとってかけがえのない「健康」と「生活」を支援する看護師・保健師を養成しています。他の看護を学ぶ大学との大きな違いは、1947（昭和22）年にマリアの宣教者フランシスコ修道会のシスターたちによって設立されたカトリックの大学であることです。本学の建学の理念は、「愛をとおして真理へ」です。この「愛」の精神は、明治時代に熊本の「ハンセン病の患者さん」へのお世話のために、外国からいらしてくださったシスターたちの行動の中にみることができます。この誰かのために役に立つ生き方である「愛」の精神に基づく人間教育を現在も変わることなく教育課程科目ならびに学校行事（クリスマス、戴帽式等）などを通して実践しているのが本学の特色です。

建学の理念を基盤とした看護師と保健師統合カリキュラムにより、対象者の個別性に対応したケアを提供することができる看護師・保健師を育成します。さらに、学生に人気の高い科目として建学の理念を具現化する「生と死の看護ゼミ」があり、人の「いのち」にかかわる看護職の意味と態度を学びます。

また、学習者の背景に対応した入試制度である社会人入試の学生や３年次編入学の学生の学習は、それぞれの経験を生かした学習内容が設定されることになり、教員も刺激を受けています。編入学生のカリキュラムは、学部学生と一部合同ですが、編入学生独自のカリキュラムを編成し学生のニーズに対応しています。

看護職という職業を通して誰かのために仕えることの奥深さと楽しさ、看護の科学性を追求しつつ、実践の本質である愛を見失うことなく、時代のニーズに即した看護を提供できる学科であり続けたいと、教員一同、教育と研究に頑張っております。

看護学科のカリキュラム構造



戴帽式を振り返って

看護学科２年　堀田　麻衣子

基礎実習を終え、みんな授業やレポート等で忙しい中、誓いの言葉を考えたり戴帽の歌を練習したりで、休む暇もなく風のように毎日が過ぎていきました。誰一人文句を言わず誰一人投げ出すことなく取り組んでいたのは、ともに頑張ってきた仲間全員で素晴らしい戴帽式を創り上げたいという思いが一人ひとりの胸の中に秘められていたからだと思います。

修養会では、それぞれが初心に返り、看護に対する思いを改めて胸に刻み込みました。

そして当日、誰一人欠けることなく、戴帽式を喜びと希望の中で迎えることができました。看護専門職を志すということを自らに問い直し、そのために自己を研鑽し続けていくことを決意する機会としてこの時を迎えました。一人ひとりの表情には看護職を目指す者の決意が表れていました。

戴帽式を迎えるまでには多くの方たちの力や支えがありました。これから看護の道を進んでいく上で様々な困難にぶつかるかもしれません。そんな時、戴帽式で誓った思いや支えてくれた方たちへの感謝を思い出し、くじけずに乗り越えていきたいと思います。

《主な支持科目紹介》

生と死の看護ゼミⅠ・Ⅱ

看護学科教授　菅原　邦子

いのちの尊厳とは何か、よりよく生きるとは何か、他者との関係の中で生きる人間にとって死のもつ意味とは何か、死は生物学的、法学的、倫理学的にどのようにとらえられているか、尊厳死とは、安楽死とは、脳死とは、ホスピスケアとは何か、出生前診断は是か非か、障害をもった人がよりよく生きるとは——。「生と死の看護ゼミ」は、多様なテーマの中からそれぞれが関心のあるものを選び、それについて段階的に学習を進めていく少人数制ゼミです。学生たちは自ら調べ、考え、発表し、討議し、体験者の話を聞いたり、病棟などを訪問したりしながら、自らの考えをさらに深めていきます。

リハビリテーション看護学Ⅰ・Ⅱ

看護学科教授　前田　明子

リハビリテーション看護学は３年次に学習します。リハビリテーションとは障害を残した人々の回復訓練や社会復帰だけではなく、人間としての復権までを意味します。そのために多くの職種が関わりますが、看護者は日々の生活の中で障害をもつ人の残っている力が発揮できるように関わっていきます。授業では日常生活の動作を判断するための指標や看護の実際を学びます。演習では車椅子乗車・介助の学外体験や呼吸障害のある人への呼吸理学療法の体験もします。また、人の立場に立てる看護者になれるようにと考えて、障害の当事者の方による講義も行われます。このような試みから学生は授業だけではわからなかった多くの学びを得ています。

看護治療学Ⅰ・Ⅱ

看護学科助教授　仲田　みぎわ

“治療”というと、多くの人はいわゆる医学的な伝統的治療を思い浮かべるでしょう。しかし、ここでの治療は従来の治療ではなく、看護によってのみ可能な、人間の健康への積極的な介入を意味しています。「看護治療学Ⅰ」では、人間をセルフケアする存在と捉え、支援する上で必要な健康学習・ヘルスプロモーションを学習します。「看護治療学Ⅱ」では、自然と調和して存在する人間の全体的な理解を図り、その概念に基づいて人間の自然力に働きかける知識・技術を学習します。また、救急場面における応用的な看護介入技術の学習をします。

学科・科紹介　—栄養学科—

学科の特徴

栄養学科長　荒川　義人

栄養学科は、「人間栄養学」の実践に基づき、医療専門職の一員として「食」を通して人々の生命と健康生活の営みに貢献しうる管理栄養士の育成に努めております。とくに小・中学校、老人保健施設、保育園、病院、保健所（または保健センター）における「学外実習」の必修・選択単位数を厚生労働省の規定よりはるかに多く設定し、臨床に強い管理栄養士の養成を目指しています。また、管理栄養士は人と直接関わる職業です。「人間栄養学」に関する高度な知識・技術ばかりでなく、患者さん、子ども、そしてお年寄りなど、さまざまな人に対して「人間愛」をもって接する備えも大切です。本学の栄養学科で学ぶ意味は、教養教育科目、専門教育科目、そして各種行事を通し、その底流にあるキリスト教的人間観から「人間愛」を育むことと言えるでしょう。厳しい社会状況の中、おかげさまで1回生はほぼ全員が希望の職に就くことができました。新たに「栄養教諭」課程の設置も予定され、これからも社会に求められる管理栄養士を養成することが栄養学科の使命と考えております。

2005年度カリキュラムの一部改訂について

栄養学科助教授　高野　良子

栄養学科では、より実践的な管理栄養士養成を目指し、2005年4月入学生より教育課程の一部改訂をする運びとなりました。改訂の大まかなポイントは以下の通りです。

① 1年次に「管理栄養士論」（必修）を配置しました。
② 教職課程設置（栄養教諭・認可申請中）による栄養教育実習（4年前期）配置に伴い、臨地学外実習の学年配当を変更し、臨床栄養に関する実習を3年次にも配置しました。
③ 科目間のより連携のとれた教育課程の構造化に努めました。

この他にも、入学時より国家試験受験対策については段階を踏まえつつ、きめ細やかに指導・助言にあたります。また、授業内容等についても、管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）に準じながら、より一層の充実を図っていきます。

「Food and Life Step-up Ceremony」を終えて

栄養学科助教授　山口　敦子

栄養学科では2004年度から、専門の講義や臨地（学外）実習の機会が多くなる2年次の後期に、管理栄養士としての夢や希望など自分の目的を再確認し、これからの学生生活を充実したものにしてもらうための「Food and Life Step-up Ceremony」を企画し、その最初の式典が10月25日（月）に行われました。

式では、はじめに近藤学長から専門職業人として働くということについてのお話があり、次いでケン神父様からは、目的に達するまで1日1段とすると約790段あるステップを、一歩一歩大切に歩むようにというお話をいただきました。その後、記念品の授与が行われ、最後に学生全員で温かく見守ってくれる家族に感謝し、多くの友人と励ましあっていくことを宣誓して式を終えました。

《主な科目紹介》

食といのちのゼミ

栄養学科教授　山本　愛子

私たちの命の源である《食》は人間の生命の誕生から終わりまで、一日もおろそかにすることができません。それは健康な時も病気の時も同様であります。人間が動物や植物といった食の素材から命をもらって、生かされているということは、ともすると忘れがちです。

管理栄養士とは《食》を通して人々の健康をサポートする専門職・技術職であります。当ゼミでは、管理栄養士として社会で活動していく上で、現実に遭遇するであろう様々な課題を想定します。《食》と人間との密接な関わり合い、《食》が人間に及ぼす影響、さらには人間の心を癒すことのできる《食》のあり方を探求していきます。これらは栄養面での指導的立場にある者にとって必須の事柄です。とりわけ、医療施設では、患者さんの栄養管理にとどまらず、疾病時の心理面も考慮することが大切です。また、食育の観点から、学童給食等においても、栄養面のみならず成長期の子どもの人格・心理を考慮し、子どもたちの心身両面の支援ができることが求められています。

様々な職場で、幅広い視野を持って、《食》を通し人間の《命》に総合的に関わっていけるだけの知識・技術の構築を目指します。

臨地実習
—実践能力を身につける重要な教科—

栄養学科教授　石川　紀子

2000年の栄養士法の一部改正によりモノからひとを中心に養成の視点が変更になり、管理栄養士業務の転換が図られました。

臨地実習は、その実践能力を身につけるうえで重要な役割を成します。わが国の保健、医療、福祉の場の栄養管理業務は新しい管理栄養士の役割に直ちに対応する事を要請しています。

管理栄養士養成の視点も医療の現場では、栄養指導活動の実践がどう営まれているのか、どう対処しているのか、その過程を学び、学生自身が知識・技術の自己評価ができる臨地実習の実践が望まれています。臨地実習の事前学習を充実し、より教育効果の高い実習体制を整え21世紀を担う管理栄養士養成を目指しています。

実り多い卒業研究

栄養学科教授　小林　良子

栄養学科の専門領域においてこれまでの学習を体系化すべく、自らがテーマを選択し、指導教員の下で個人またはグループで主体的に研究を進めます。

成果は学科内の卒業研究報告会で発表し、研究報告にまとめます。

学部学生の場合、本格的な研究や報告作成に関して大半が未経験または経験不足と考えられますが、将来研究生活に入る可能性があるわけですから、そのような場合に役立つよう、卒業研究を通じて研究の進め方や報告の作成方法などを習得してもらうことが重要な目的の一つであります。

学科・科紹介　—教養教育科—

教養教育科では今

教養教育科長　後藤　聡

東京にある精神薄弱児施設の子どもたちが、修学旅行で京都へ行ったときの話を聞いたことがあります。新幹線に乗ったところ、一人の子どもが新幹線で行くのは嫌だと言い出したため、その子は先生と一緒に各駅停車へ乗り換えたそうです。子どもに理由を尋ねたら、新幹線では、停まらない駅が可哀そうだということでした。途中で出会った駅の様子やその周りの景色を見ながら何かしらの思いに浸ることは、それら一つ一つを大切にすることであると同時に、旅への味付けになるのではないでしょうか。

近年、学習指導要領が改訂され、初等・中等教育での学習内容が削減されるとともに、高等学校での選択科目が増加しています。理由の一つはゆとり教育ですが、それは一つ誤れば目的優先、そこへの最短距離を最善とする効率主義を生み、子どもたちに狭い学習をさせる危険があると思います。

大学における専門教育の重要性は言うまでもないことですが、学生の知識や思考の幅を広め、知的能力をより発展させるのは、リベラル・アーツとしての教養教育の役割です。専門教育とはちょっと風変わりな、しかし余韻を感じながら専門職の旅を営むことができる味を提供する、そんな存在としての教養教育でありたいと思います。そのために教養教育科では、看護、栄養の対象である人間を探究する、あるいは建学の精神「愛をとおして真理へ」に基づいた普遍的価値観を備えて社会の変化に対応できる人材を育成する上で、どのようなカリキュラムや授業内容がふさわしいか、日々検討を行っています。

学生が将来、専門職業人としてより味と輝きの深い「地の塩・世の光」となれるよう、微力ながら教養教育が貢献できれば幸いです。

◎研究紹介

移住と宗教・文化変容
—戦後日本社会の産業化と宗教・世界観の変容

教養教育科教授　田島　忠篤

人間は、一般的に動物とは異なり、現実の五感で捉えられる「見える世界」だけではなく、「見えない世界」と意味づけて行動を取ります。私の興味は、その意味づけの元となる文化や宗教です。文化や宗教は、当事者が意識するしないにかかわらず、人間の行為と関連しています。ここでいう宗教は、所属が自他ともにはっきりしているユダヤ教、キリスト教やイスラム教だけではなく、日本の民間神道のように所属の曖昧な民俗宗教も含めています。

「見えない世界」と人間の行為との関連を研究する場合、文献資料を主とする研究方法と、現実に行動する人々を対象とする研究方法があります。私の場合は、前者を参考にしつつ、後者に力点を置いた研究方法をとっております。具体的には、アンケート調査をしたり、生活現場を訪れてフィールド・ワーク（野外調査）をしたりすることです。ここでは、文献研究のような抽象的理論を研究するだけではなく、抽象的理論を個々具体的な社会事象にあてはめて分析したり、個々具体的な社会事象から抽象的な関連性を表した仮説や理論を構築したりすることに重点が置かれます。

ここまでは私の研究の興味関心、研究方法について述べてきましたが、最後に、研究対象について説明したいと思います。私は、28年前から奄美大島にある一つの比較的自律性の高い村落を対象として研究しております。その村は、高度経済成長前までは、統制力の強い独自の自治組織を持ち、経済的な自給自足率も高く、ムラの子弟だけが通う小学校があり、ノロと呼ばれる女性祭司を中心とした村人全員参加の村落祭祀集団があり、行政、経済、教育、宗教と全ての面において自律性が高い村でした。しかし、60、70年代の高度経済成長後、現金収入をもとめ村人は、大都市圏へ出稼ぎや就職のために移住していきました。その結果、現在は、少子高齢化したムラとなっています。

私は、この村の歩みの中に、第一次産業から第二、第三次産業へとシフトして、村から都市へと生活が変わり、さらに、少子高齢化した日本社会が戦後たどってきた一つのモデルを見たいと考えております。とりわけ、戦後、日本社会の中で、村の文化や宗教を基礎とした「見えない世界」観がどのように変化するのか、それをじっと見守りたいと思いながら研究をしております。

◎研究助成を受けました

自由とキリスト教

教養教育科講師　堀井　泰明

これは昨年度、僕が日本カトリック大学連盟から研究助成を受けた研究課題のタイトルである。正式には「自由から見たキリスト教ヒューマニズム——痴呆介護に自由概念を導入する研究」というもので、藤女子大学の伊藤春樹教授と共同で研究を進め、その成果については今年、上智人間学会や日本生命倫理学会などですでに発表した。そもそも介護や看護などの現場において、ケアする側とケアされる側双方の人権を守るにはどうしたらよいのか、助ける側助けられる側双方が意義と尊厳を感じられるようなケアは可能なのか、という問題意識から出発したもので、伊藤教授が福祉学の立場から、僕が倫理学の立場から様々な意見や視点を出し合いながら考察を展開した。特に痴呆（認知症）高齢者をめぐっては、意思疎通や相互理解の困難さが存在し、さらに現在全国で300万人強存在する要介護認定者のうち半数は「何らかの介護・支援を必要とする痴呆がある高齢者」であり、施設入所者ではその割合は８割を超え、2015年にはその数が250万人に達すると予測されている。それゆえ痴呆高齢者のケアをめぐる問題は現代の社会的課題なのである。

結局ケアにおいて重要なことは、「助ける」ことではなく、その人の価値を見出すことであり、他者の自由な行為の中にその人の価値を見出すことは、その人に対する尊厳に他ならない。価値を見出すこと、尊厳を守ることは、その人の自由な行動を伴った人間関係の中で確立するものであり、価値を見出されることは、その人が他者にとって必要な存在である自分を認識する大きな助けとなる。また、ケアされるときに自分の中にそれだけの価値を見出されながら、その価値が自身でも確認できるようなケアがされれば、これほどうれしいことはないし、また逆に無理なく価値を見出せ、その認識に対して応える人の世話をすることほど楽で愉快なケアはないはずである。こうしたケアの方向性を現実に実践してゆく方策を今後も考え続けたい。

実はしかし、他者の自由を尊重し、他者の内に尊厳を見出すことはキリスト教本来のメッセージでもある。なぜならキリストこそ、社会から見放され、侮蔑され、絶望していた人に寄り添い、その人をあるがままに受け止め、それによりその人は本当の自分を取り戻し、心の奥底にある恵みに気づけたからである。この研究にはそれゆえ上記のテーマを付けた。同時に、キリスト教（カトリック）教育を標榜し、それに携わる者こそ、他者の自由を尊重し、その尊厳を守らねばならない。それをいつも肝に銘じたい。

片桐千明先生
退職記念講演会が開催されました

教養教育科の片桐千明教授が2005年３月31日をもって定年退職されます。片桐先生が日ごろからご尽力なさった教育とご研鑽を積まれた研究に敬意を表して、天使大学主催の退職記念講演会が2005年１月28日（金）、本学6101講義室を会場として開催されました。演題「カエルから見た世界」の講演に、多数の教職員、学生が耳を傾けました。講演終了後は、場所を移し、片桐先生を囲む茶話会が開催され、和やかで楽しい時間を過ごしました。

卒業を迎えて

卒業にあたって

栄養学科４年　池　香苗

卒業間近の今となっては「もう卒業か……」と思ってしまいます。特に４年生になってからの１年間は実習と勉強に追われ、とても早く時間が過ぎたように思います。

大学に入学してすぐの頃は、全てが目新しく思えてとても新鮮でした。授業も自分で選択できるので教えられるのではなく自分から学ぶという姿勢が強かった気がします。この時は「大学生活ってなんて自由なのだろう！」と歓喜していましたが、自由というのは決して楽なことではなく、そこには常に自己判断・自己責任という言葉がついてまわりました。もともと自己管理が甘かった私はとても苦労しました。

しかし、天使大学で過ごした４年間の中でたくさんの人に出会い、学び、経験することによって少しずつ自分が成長していくのがわかりました。はじめは管理栄養士という職業を目指すことに対して「このままで良いのだろうか」と疑問を感じることもありましたが、実習を重ねるにつれ、「この職業を選んで良かった」と思うようになりました。天使大学に入学したからこそ学べたたくさんの事、経験できた事、出会えた人、たくさんの思い出があります。

学べるという事は本当に幸せなことだと思います。これから先、社会に出ると一層のこと自分から学ばなくてはいけません。そう考えるととても不安ですが、いつでも帰ってくることができる母校があると思い、天使大学卒業生として誇りと自覚を持って前進していきたいと思います。

絆

栄養学科４年　松野　絵麻

私にとって天使大学は少し窮屈で、でもとても温かい場所でした。おそらくみんなが、多少なりともこう感じていることと思います。

今でもよく覚えています。入学して最初のオリエンテーションで担任の先生がこうおっしゃいました。「一人暮らしの人はレトルトのお粥を買っておきなさい。一人暮らしで熱を出すと本当に辛いものです。そして早く、そんなときに駆けつけてくれる友人を作りなさい」と。私はこの言葉に、天使大学での４年間が詰まっているように思います。

先生方は時々うっとおしく感じてしまうほど、学生のことを想ってくれました。大学での講義や学内外の実習に留まらず、学生の私生活にまで危険や困難がないようにと、気を配ってくださいました。私は入学した春、レトルトのお粥を買いました。

４年間の大学生活、苦しかったことが沢山ありました。正直、大学でこんなに心が動かされることが沢山あるなんて、思っていませんでした。高校、大学、そして社会人。私は大人になればなるほど、人と心で接する機会は減っていくような気がしていました。でも先生方は学生一人ひとりときちんと向かい合ってくださり、学生同士は実習を一つ乗り越える度に、強い絆で結ばれていきました。私は天使大学で、辛いときに駆けつけてくれる友人に出会うことができました。

天使大学での４年間は私にとって大きな財産です。みんなとの絆を誇りに思い、胸を張って巣立って行こうと思います。

卒業にあたって

看護学科４年　松田　梓

天使大学の学生として過ごしてきた４年間がもうすぐ終わろうとしています。振り返ってみると、本当にあっという間の４年間でした。４年前、緊張しながら迎えた入学式を終えて数日後、突然「出会いと親睦のゼミ」という名の１泊２日の旅（？）に行ったことを思い出します。当時、右も左もわからず、全く知らない人たちの中に自分が「ぽんっ」と放り込まれたような不安でいっぱいでした。しかし今思うと、あの修養会がなければ、これほどまでに素晴らしい４年間はなかったかもしれません。あのときに親しくなった友人は、今や私にとってかけがえのない存在となっています。

天使大学で学んだ最も大きなことは、看護の精神、看護の素晴らしさだけではなく、看護を支える「人と人とのつながり」であると私は思います。この４年間、実習や課題など辛いことは山ほどありましたが、それを乗り越えられたのは、いつも誰かが支えてくれていたからです。先生方や大学職員の方々、先輩、後輩、友人たち、そして家族。悩んだとき、困ったときには、いつも誰かが手を伸ばしてくれ、その度に立ち直ることができました。

４月には、一社会人、また一専門職者となり、この学び舎を後にします。天使大学で学んだ、周囲への感謝の気持ち、「看護は人対人」という精神を大切にしながら、新たな気持ちで歩んでいきたいと思います。

卒業を前に

看護学科４年　吉田　絵魅利

真新しいスーツ、見慣れない仲間……大学生活の始まりが、つい昨日のことのように思い出されます。入学式の際、「私たち、これで看護師になれるんだね」と言った友人の言葉に、漠然とした憧れや期待を抱き、自分の夢に近づくことができるという興奮が私の中に残ったことを覚えています。

あれからの４年間は、単に「充実していた」と一言で片付けてしまうには物足りないほど、毎日が忙しく過ぎていきました。朝から夕方まで続く講義、沢山のレポート、慢性睡眠不足だった実習……私にとって、決して楽にこなすことのできるものばかりではありませんでした。特に実習では多くの患者さんと接する中で、人と関わることの楽しさだけでなく、関わる上での責任の重さも実感することができ、自分と向き合うことが患者さんに「愛」を持ってケアしていくことにつながるということを学ぶことができました。

そんな中、楽しい時も辛い時も私の周りには常に多くの仲間がいました。４年前に「いた」仲間は、それぞれの中にある「誰かの役に立ちたい」という夢に向かい、共に支えあってきたなかで「大切な」仲間になりました。「愛をとおして真理へ」という建学精神のもと、「看護者」として育ってきただけでなく、１人の人間として大切なものに気づき、確かなものにしていくことができた貴重な４年間であったと思います。

私たちにはすぐ目の前に新しいスタートが待っています。すでに着慣れたスーツは、４年間の努力を知っています。しっかりと前を見て胸を張って、自分のスタートを切ることができるでしょう。

最後に、これまで多くの人々の支えの中で今の私たちが在ることに心から感謝しています。今度は私たちが多くの人の支えとなる存在であり続けることでお返ししていきたいと思います。

実習で学んだこと

基礎看護実習での学び

看護学科２年　藤崎　里枝

10月18日からスタートした初めての基礎看護学臨地実習は、今改めて思い起こせば、あっという間の出来事だった。初めて１人の患者さんを受け持つという重大さと自分がどこまで患者さんをケアできるのかという不安を感じながらも、よき指導者さんと先生、そして共に実習に臨んだメンバーに励まし支えられ、私はこの実習から多くの学びを得ることができた。

私が受け持った患者さんは退院間近で、演習で学んだ援助技術を使わなくとも自立できていて、最初は自分が何をしたらいいのかわからず、行動計画を書くのにいつも悩んでいた。しかし、コミュニケーションを通して患者さんの表情や言葉の端々から退院後の生活に不安を持っているということに気づき、この不安を取り除く援助が患者さんにとって１番必要なことだと思い、指導者さんと共に退院指導を行うことで、患者さんは不安なく元気に退院することができた。

実習中は毎日がわからない事の連続で、自分が本当に患者さんのためになる援助ができているのか不安に思っていたが、退院していく患者さんが私の手を握って「ありがとう」と笑顔で言ってくれたのを見たとき、その不安がうれしさで吹き飛んでしまった。

私はこの実習で、患者さんの思いに気づき、思いに沿った看護をすることの難しさを知った。また、毎日の実習を終えた後に、自分の行った看護の振り返りをして、明日の看護へとつなげることが重要だと学んだ。この学びを忘れず、これからの実習に役立てていきたいと思う。

老年実習を振り返って

看護学科３年　堤　綾子

今、実習記録を読み返し、改めて実習とは有意義なものだと感じた。深い人間関係を築く場であり、振り絞って出すわずかな知識を事実とつなぎ合わせる事に頭をフル回転させ、相手の心情をわかろうと心を研ぎ澄ませ、五感を使って常に観察しようとしているのです。四六時中、患者さんのことが頭を離れず、患者さんの言動に一喜一憂している自分の姿を思い出した。

この老年実習で私は「患者さんとのかかわりの中で自分の声かけや行動を振り返り自分を問い直す習慣を身に付ける」ということを自己課題のひとつとして挙げていた。自分の発言や行動がどう患者さんに影響していたか、また、患者さんのその言葉と行動の裏には、どういう心理が働いているのだろうと考えることよって、患者さんの求めていることに近づくことができ、それに対して必要な援助は何か、私にできることは何かというステップが踏めるようになったと思う。さらに、患者さんの心理を予測したり考えたりすることで、一見言葉と行動が矛盾していたり、多様な人物像を描く患者さんであってもひとりの人間としてつなぐことができます。包括的に捉えることができるのです。初歩的なことかもしれないが、それらを学べたことは私にとって大きな一歩であった。この先の実習でも、この学びを忘れず、そして新たな学びを得ながら前進していきたいと思う。

「豪華で、ヘルシーな給食」を提供するまで
―給食経営管理論実習Ⅰを終えて―

栄養学科２年　長谷川　奈々

２年次の実習において、一番印象に残っているのは給食経営管理論の実習です。この実習では、学内の先生方や学生を対象として、いくつかのグループに分かれて献立を作成し、実際に給食を提供していきました。自分たちの作った給食が、多くの人の口に入ることを考えると、本当に夜も眠れないほど緊張しました。特に私たちのグループは今回の実習の一番最後に提供する給食を任されたこともあり、そのプレッシャーはとても大きいものでした。

「豪華で、ヘルシーな給食」――それが私たちのグループの目標だったのですが、それを達成するまでには困難を極めました。何度も何度も献立を書き直し、試作を行いました。その結果、メニューは、鮭といくらを使った「親子ちらし」「シーフード卵蒸し」「のっぺい汁」「粉雪ドーナツ」になりました。その過程では、周りのグループとの実習内容の差に悩んだり、メンバーとの意見の相違で悩んだりと、この実習が嫌になることもありました。でも、自分たちが苦労して作った給食を食べてもらえた時やその給食をおいしいといってもらえた時の感動は、とても大きかったです。また、講義とは違い、自分で判断することや対象者のことを考えて献立を立てることの大切さを学べたと思います。

長いようで短い、あっという間の半年間でしたが、先生方や友人、グループのメンバー、喫食者の方々から学んだことが本当にたくさんあり、とても充実した実習となりました。これからは、今まで学び得たことを忘れず、他の実習や実際の現場に活かしていきたいと思います。

子どもたちと触れあえた学校給食実習
―給食経営管理論実習Ⅱを終えて―

栄養学科３年　山下　多恵子

初めての学外実習は、給食経営管理論実習Ⅱの学校給食実習でした。私は小学校へ実習に行き、小学生への栄養教育や給食献立を考えて実際に作るなど多くのことを体験しました。

その中で最も印象に残っているのは栄養教育です。栄養教育は給食前の５分間を毎日と、授業時間の45分間を使って行いました。生まれて初めて子どもたちを前にしての栄養教育で、指導案や媒体作成など児童に合わせたものにするにはどうしたらよいかとても悩みました。実際に小学校に通うのは５日間だけですが、事前訪問やＦＡＸでのやりとりなど何回も何回も繰り返し、実習中も大学に戻ってきて準備を重ねました。そして、実際に栄養教育を行い、知らないことを教える難しさや媒体の使い方、言葉の表現の方法など、たくさんのことを学ぶことができました。また、栄養教育を通して児童たちと触れあっていく中で、だんだんと食べ物について興味を持ってくれたことや、給食前の栄養教育を「今日は何の食べ物について？」と楽しみにしてくれたことから、教えることの楽しさや素晴らしさも実感できました。

実習中は辛いことや苦しいこともありましたが、子どもたちや栄養士さん、先生方、友人たちなどたくさんの方々からパワーをもらってやり遂げることができました。その中で子どもたちの笑顔に接し、食べ物を通したつながりの中で仕事をする学校栄養士の素晴らしさを実感しました。

毎日遅くまで指導してくださった先生方や一緒に苦労した仲間など多くのサポートがあって、この実習が充実したものになったのだと思います。この実習で体験した様々なことを今後に活かしていきたいと思います。

就職活動

目標に向かって地道に努力

栄養学科４年　鵜川　園子

私は大学に入学した当初から学校給食の領域で働きたいと思い続けてきました。しかし、札幌市採用試験倍率は何十倍。この狭き門を通り抜けるには並大抵なことをしても無理なことは想像がつきます。さらに、私は人より時間がかかる性格です。この状況で、どうしたら目標に到達できるのか……。私は早い時期から、少しずつでも勉強を始めることにしました。

早い時期から就職のことを考えて準備を始めてみたものの、思うように進まないと焦りや不安を感じ、この目標に突き進んでいってよいのか、別の道を考えたほうがよいのか、悩む時期もありました。しかし後戻りできない状況にはならないように、学内外の就職セミナーには積極的に参加して、選択肢を初めから狭めてしまわないようにしました。その中でもやはり目標は変わらず、意志は強くなる一方でしたので、この目標に向かって、自分のできる限りのことを精一杯していこうと思いました。就職活動に関する本は何冊も目を通しました。苦手であった面接も模擬面接で何度も練習しました。常にアンテナを張って情報収集することも大切にしました。結果、第一希望のところに内定をいただくことができました。

就職活動は内定をもらって終わりではなく、その後も大切であると思います。社会に貢献できる人材になれるように日々努力していきたいと思います。

自分らしい看護を大切に

看護学科４年　西田　恵梨

私は、看護師として病院で働くだけではなく、看護教員となって次の世代に自分が得たものを伝える立場になりたいとずっと考えていました。その夢を実現するための第一歩となる就職活動は、私にとってとても重要なことでした。

私は、病院を選ぶ際に、看護師として初めて働く場所なので、住み慣れた札幌にあること、また１年目は学生の時と実際に働いた時の違いにショックを受けるだろうと思っていたので、１年目の教育が充実しているということを条件としました。その条件に合う病院を３つ見学し、自分の受けた印象が一番良かったところを受験しました。その病院の試験は、ロールプレイ演習という少し変わったものだったので、同じ病院を受ける友人と少し練習をして試験に臨みました。受験日までは、落ちたらどうしようという不安でいっぱいでしたが、今まで自分が実習などで行ってきた看護を大切にして、自分らしさを試験で出せればよいと考えるようにしていました。当日は緊張しましたが、無事合格することができました。私は、就職先を決めるプロセスとして、まずは、どういう看護がしたいのかや将来の方向性を定め、その方向に進むためには、自分が就職先に何を求めるかを考え、条件にあった病院を見つけ、見学に行くべきだと思います。紙面で見るのと、実際の病院の印象は違うことが多いので、実際に見た印象を大切にしてほしいと思います。

食品衛生監視員に合格！
就職するにあたって

栄養学科４年　山本　祥子

私は４年間、食について学んできました。「給食管理」「公衆栄養」など、様々な分野を学習しましたが、私がその中でも特に強く興味を持ったのは食品衛生学です。なぜかというと、食品においては美味しさや価格などはもちろん大切ですが、その中でも最も重要である条件は「安全であること」であると感じるようになったからです。

私は入学してからずっと、漠然と卒業後は管理栄養士として就職しようと考えていました。しかし就職活動を始めるにあたり、本当にそれで良いのだろうかと自分自身に疑問を感じ、「自分が本当にやってみたい仕事はなんだろう」とじっくり考え直しました。そしてそれは食品衛生に関わる仕事だと考えるようになり、全国の港や空港における輸入食品の安全監視や指導、検疫感染症の国内への侵入防止などを行う、食品衛生監視員という仕事の求人情報を見つけ、強い関心を持ちました。

しかし過去に天使大学からこの試験を受験した人はいないということだったので、試験当日は不安を感じながら受験会場へ向かいました。しかし試験の内容は、食品衛生学や公衆衛生学など、私が学んできた知識で十分解答できる範囲からの出題でした。そしてあまり気負うことなく落ち着いて試験に臨めたことが良かったのか、幸運にも無事試験に合格することができました。

近年は特に食品の安全性が強く求められています。食品の検疫業務に求められている期待と責任はとても大きいものだと思いますが、そのような期待に応えられるような仕事ができればと考えています。

栄養学科と資格

本学栄養学科では、卒業すると同時に、栄養士の資格を取得できます。国家試験に合格することで管理栄養士の資格取得となります。また、卒業に必要な必修科目の他に「有機化学」もしくは「化学」を履修し単位を修得することで、「食品衛生管理者資格」「食品衛生監視員任用資格」も取得できます。この他に、2005年４月には、栄養教諭養成の教職課程設置（認可申請中）が予定されており、必要単位の修得により栄養教諭免許の取得が可能となります。

学事暦

９月６日（月）　後期授業開始
10月２日（土）　大学院　推薦入学試験
10月９日（土）　第３回オープンキャンパス
10月16日（土）　看護学科　編入学Ⅰ期試験一般・社会人入学試験・大学院　一般・社会人入学試験（前期）
10月25日（月）　Food and Life Step-up Ceremony
11月12日（金）　体育祭
11月13日（土）　推薦入学試験・社会人入学試験
11月20日（土）　栄養学科　編入学試験
11月26日（金）　戴帽式
12月８日（水）　創立記念日
12月16日（木）　クリスマスの集い・学生総会
12月18日（土）　大学院　資格認定試験（後期）
12月20日（月）～１月10日（月）　冬季休暇
１月15日（土）～16日（日）　大学入試センター試験
１月22日（土）　看護学科　編入学Ⅱ期試験
１月29日（土）　大学院　一般・社会人入学試験（後期）
２月６日（日）　学部一般入学試験（学科試験）
２月７日（月）　一般入学試験（栄養学科面接）
２月14日（月）　一般入学試験（看護学科面接）
２月18日（金）　大学入試センター試験利用入学試験(面接)
３月14日（月）　卒業感謝ミサ
３月15日（火）　卒業証書・学位記授与式

第6回 天使大学看護栄養学部公開講座のご案内

公開講座委員会委員長　佐藤昇子

★2005年度に開催予定の第６回天使大学看護栄養学部公開講座の概要をご案内いたします。

1. 前期講座　テーマ：「健康にかかわる情報をインターネットで検索してみよう」

趣　旨：パソコンの初心者が、健康に関わる情報をインターネットで手軽に検索し、必要な情報を得ることができるように解説ならびに演習を行います。

日　程：2005年７月15日（金）・22日（金）　18：30～20：00

対　象：パソコン初心者（40名）

講　師：本学助教授　川口雄一

受講料：500円

2. 後期講座　全体テーマ：「日々の安心・安全を求めて」

趣　旨：国際化、情報化、高齢化社会に生きる私たちが、日常生活を安全で安心して暮らすために必要な知識と技術を、心理学・栄養学・看護学・哲学の立場から考えます。

日　程：2005年９月７日～10月５日の毎週水曜日 18：30～20：00
※ただし、第２回のみ火曜日

対　象：地域住民（100名）

受講料：1000円

■講師と講演テーマ

回	講演テーマ	講師	講演月日
1	安心のある人との関わり －受け入れることの大切さ	本学教授　後藤　聡	９月７日㈬
2	家庭でできる食中毒予防	本学助教授　山部秀子	９月13日㈫
3	動作の安全と生活	藤女子大学教授　橋本伸也氏	９月21日㈬
4	元気の源は口から食べること	本学教授　瀧　断子	９月28日㈬
5	不確かな時代を生きる思想 －V.E.フランクルを読む－	本学講師　堀井泰明	10月５日㈬

2004年度在籍者数（2005年２月15日現在）

学科名	学年	人　数
看護学科	1年	90
	2年	91
	3年	97
	4年	90
栄養学科	1年	97
	2年	92
	3年	109
	4年	97
大学院		27

2004年度 天使大学看護栄養学部 栄養学科教員研修会が開催されました

さる２月12日（土）、本学において標記の研修会が行われました。研修会の講師として東口高志先生（藤田保健衛生大学医学部教授）をお招きし、「ＮＳＴ（栄養サポートチーム）の現状と管理栄養士の役割」と題した講演をいただきました。東口先生は、今年１月初旬に放映されたＮＨＫスペシャル「食べて治す」で取り上げられた活動の中心を担っていらっしゃる外科医です。会場には本学教職員、学生をはじめとして、管理栄養士、看護師の方々など230名を超える参加があり、盛会のうちに研修会を終えることができました。

編集後記

学報第９号をお届けします。本号では、学部の各学科・科、および大学院の近況報告を特集いたしました。大学学部の完成年度を過ぎ、2005年３月には、卒業生２回生を送りだします。この１年、また新たな一歩を踏み出した本学の取り組みを、本号から少しでも感じとっていただければ幸いです。2005年４月には、栄養教諭養成の教職課程設置（認可申請中）が予定されております。本号のカットは３月末をもって退職される片桐千明先生によるものです。ほっとする暖かみを添えてくれる作品の数々をありがとうございました。新年度もまた、新たな取り組みを発信できる学報でありたいと思います。読者諸氏の皆さまからの学報へのご意見ご要望をお待ちしております。　（広報委員会　黒川・青木）

R100 天使大学報は古紙100%再生紙を使用しています。